

The *Tractatus Orthographiae* of T. H., Parisii Studentis

—パリの学生 T. H. による正綴論— 訳述

福 井 秀 加

ノルマンディ公ウイリアムのイングランド征服はその後少くとも3世紀余の間、イングランドの支配階級の言語をフランス語（最初は主にノルマンディ方言）と変えたのであった。このフランス語は西部・北部方言を基盤とし、大陸のフランス語と異なる発達を遂げるので、言語学上アングロノルマン又はアングロフレンチと呼ぶのである。

イングランド王でありながらフランス大陸に広範囲の領地を所有していたヘンリー二世（1154—1189）はアキテーヌのエレオノールを王妃に迎えて領土を更にスコットランドからピレネにまで拡げ、西ヨーロッパにその勢力を誇示したのであった。このヘンリー二世の宮廷は英国の歴史に重要な意味をもたらした。以後中世全期に亘って地中海文明と密接な交渉を維持するようになったからである。彼の宮廷には各地から学者、詩人、騎士が集まり、文学作品その他アングロノルマン語による作品も数多く作成された。

しかしジョン王（1199—1216）の治世にアキテーヌ、ガスコーニュを除くフランスの領地が失われたという政治的事態の変化は一つの引き金となってアングロノルマン言語を徐々に衰退へとむかわせる。13世紀半ばとなるとイングランドに広まっていたアングロノルマン語、またその文学は最盛期に達するのであるが、この言語は、しかしながら、大陸フランス語とは異なる、島嶼フランス語となって、時の経過とともに大陸フランス語との劈開を深め、誰の母語でもなくなり、学習しなければならない言語となっていたのである。イングランドにおけるフランス語の優勢は14世紀半ばごろから次第に衰えてゆく。しかし、14世紀になるとイングランドではフランス語の学習が奨励された。政治的見地からみると、それはエドワード三世がフランスの王位継承権を主張して英仏百年戦争を勃発させた時期であった。フランスとの関係を緊密にするための先々への配慮でもあったのだろう。

13世紀より14世紀にかけてイングランドのイギリス人のために、フランス語教本が相当数作られたらしい。現存する最も古いフランス語教科書^①（アングロノルマン語と言ってよい）はWalter de BibbesworthがEssex洲のWilliam de Munchensyの奥方に献呈したものである。彼女は孫娘のDionysiaにフランス語を教えるために教科書（語彙集）

の作成を依頼したと言われている。(Bibbesworth の *Treatise* については拙稿大手前女子大学論集第 9 号, 第 15 号を参照されたい) この時期には, 衰退した島嶼語をよいフランス語へと復帰させるために, 正字法論や文法書が多く書かれた。

最も普及した教本は 14 世紀半ばに作られた *Orthographia Gallica*^② であった。これはラテン語によるフランス語文字論, 正綴法の書で文法書と言えるものである。この種の文法書には Orléans 出身の司教座聖堂参事会員 Coyfurelly の編纂したフランス語正書法に関する論文 *Tractatus Orthographie Gallicane*^③ もある。そして, Coyfurelly が原典としたと推測される *Tractatus Orthographiae*^④ も現存している。これは Paris で勉強したという T.H. の頭文字を持つ学生が作成した。これらはフランス語教本として初期のものであるから文法の記述は漠然とした曖昧なところが多いが, 当時のアングロノルマン語の実態を知る上で貴重な文献である。何となれば教本は大陸フランス語を正しく示そうとしているけれども, その説明には教本の著者や注釈者が身近に親しんできた言語, 即ちアングロノルマン語の特徴が随所に現われてきているからである。しかし彼等はフランス語の地方的な差異に留意しようと心掛けた。*Tractatus* には Gallicum と Romanicum との音声状況の相異も説明され, 特にイングランド人のフランス語発音や書法についても言及されている。

本稿は現存するフランス語文法論の中で一番古いものであろうと見做される^⑤ *Tractatus Orthographiae of T.H., Parisii Studentis* を翻訳し, アングロノルマン語の実態を推測させ得る個所や, 曖昧な個所, 明らかな間違いの個所には注釈をほどこすこととした。翻訳には M. K. Pope ed., THE 'Tractatus Orthographiae' of T. H., PARISII STUDENTIS を基とし, 後掲の写本 British Library Addit. 17716 f. 88^r—91^r を参照している。なお, 筆者のコメントは * 印を付して原文と区別する。

— 訳 —

誰であれ援助に欠けている者がすみやかに助けを得たいと期待しているところで私はそれを扶ける。というのは, 若い時に様々な能力をもって花咲かそうと多くの者が望んでいるからだ。それはちょうど様々な木と草木の力を立派に植え込んである庭が初夏に屢々果実をみのらせ, 薫り高い香気を馥郁と漂わせるのを見るようなものである。

従って, 一つにして三つの位におわします三位一体のお導きにより, 私は力及ばざる者ではあるがガリア人の言葉とガリア語の規則に従った文章の形を守ろうと意図する。そしてまた, 海の此方の国々と同様, 海を越えた国々で現在生活している人達の慣習に従ってそれをやさしく説明する。草木の枝々はその習性と知識によってまず花開き, ついで他の枝の中においても花は美しく現れ得るであろう。すべての王の寛容のお蔭によって。

〔コメントには以下*印を付す〕

1. まず最初に、文字の中のあるものは母音で、あるものは子音であると知るべきだ。母音は5つ、即ち a, e, i, o と u である。それらが母音と言われるのは、おのずから完全な音を持ち、それら無くしては如何なる文字の音も発音され得ぬからである。

これらの五つの母音のうち、二つは子音の性質に移行する。即ち i と u である。それはそれらがある音節の始めに置かれ、そして後続母音と同じ音節を作る時だ。例えば：iuere, vaulter, iouster, verser など。また、同様の言葉にあっても同じである。

* i と u とが半母音になる場合の説明。

2. 時に A はほとんど字母 e のように発音しなければならないということを知るべきである。即ち：

Sauz vous faire un chauncoun. (詩歌がつくれますか)

Sauz vous traire de l'ark. (弓がひけますか)

Sauz vous raire la barbe. (ひげを剃れますか)

など、そしてこれに同様の場合である。

* この記述においては A と書くのは不正確であって正しくは ai と書かねばならない。アングロノルマンの綴り ai と ei の互換性については M. K. Pope 「アングロノルマン語」^⑥ [47.1.—2.] に記載されている。二重母音 ai, ei は水平化されて [ε] の音価を持っていた。Pope : [35.3.1.0., 35.3.3.0.]

(a) 次のような言葉：a, en a, および i a, が動詞 habet として理解される時、それらはいずれも同じ意味である。

そのあとに文字 d を添えずに書かねばならない。従って a, en a, と書くとき d を付す人は間違っている。何故ならばガリア人 (gallicos) によると d は決して書かれもせず、発音されもしないからである。

* 語末に d を付すのが間違っているとは言い切れない。ad と書くのは古形であって語源的にはラテン語の語末子音を保持していることであるから。アングロノルマン語 (以下 AN と略す) の特徴としてはこの古形が多く見られる。Pope : [38.1.1.3.—4.] これはアングロノルマンの一面の保守性である。secundum gallicos (ガリア人によると) という表現は大陸フランス人を指しているのであるが、正確にはどの地方の人々を示すかは不明瞭である。

(b) 次のような言葉：aura（彼は持つだろう）en array（私はそれを持つだろう）は語の真中に e を発音せず [また真中の e 無しに書かねばならない] 美しいフランス語によれば v なしに発音する。そしてこのように：aray, en array と発音し、このように書き得る。

しかし、ローマ人 (Romanici) ブリタニア人 (Britannici) アングリア人 (Anglii) は真中に e を添えて同じ語を次のように：aueray, j'aueray と書く。そして同様の言葉にあっても同じである。

* これは AN の顕著な特徴の一つである渡り音 e を v と r の間に挿入するという現実を示している。この現実を *Tractatus Orthographiae* の作者は指摘し、矯正せんとするのである。しかし、aray と書いてもよいし、array と rr の綴りをもって書いても同じだ、という記述も AN の特徴である。ローマ人、ブリタニア人、アングリア人という記述も、どの民族を正確に指しているのか判然としない。作者は美しいフランス語 dulce gallicum を専ら記述しようと意図しているけれども、作者自身の中に大陸フランス語と AN 語との混乱があり、往々にして AN の特徴を「美しいフランス語」と解しているらしいところがみられる。

3. B は語の真中では発音しなければならない。debriser や trubuler などのように。但し次の言葉は除く：debt, endebt, subget や、同じくこれらの動詞 doubter, redoubter, substituer。

そしてまた、同様の語にあっては B は真中に書かれねばならないが、発音してはならない。

* AN では語中の b をあるものは発音し、あるものは発音しなかったようだ。substituer は soustituer と、substance は sustance と共存する。英語における借用は OED の初例に ca 1300 : *Cursor Mundi* 9762 行の substance がみられる。

4. C はしかし語中でまた s の音を持つ。次の語：ca, pica, recoi, frauncois, rauncon, chauncoun などと同じく。そこで s を書く者は間違いである。

* AN では s の音価を持つ c の場所に s の綴りも現われている。例えば fransois, offis (office) など。

5. Eが語の中で消失し, *jeo aime* (私は愛する) や *jeo eusse loie* (聞くことができよう) や同様の語におけるように e の後に続く語が a, e, または o で始まる時, e は完全に削除される。そして *jaime, ieousse loie* のように二つの語から一つの語が作られる。しかし子音の性質に移行する母音はこの規則に従わない。

* 問題は *jeo* の e が *aime, eusse* の前で, *le* の e が *oie* の前で消失することを論じているのであろう。また例文 *ieousse loie* (*jeo/usse/l'/oie*) にあっては *usse* に対する *eusse* の語頭の e の省略も考えられていたのかもしれない。また, *oie* が‘鷺鳥’であればこの場合は AN の特徴であるところの *la* にかわる *le* の e 省略ということだ。Pope: [63. 3.]

6. Gが語の中で母音と子音の間に置かれるとほとんど *ng* の音を持つ: *compaignoun, compaign* のようにである。

* この記述にあっては *ng* の音が不明である。n の硬口蓋音 [ŋ] の表記に一定の法則がない。*gn, ngn* のどちらの綴りも現存した。[ŋ] 音は英語の借用語にあっては受け入れられ難い音であった。AN では [ŋ] が [n] に移行している例が散見される。Pope: [38.2.1.0.] は次の例を挙げている。

^⑦
Brendan 235-6 *plein-desdeign*, 215-6 *feignent-peinent*, 591-2 *semaine-cumpaine*, 713-4 *meinet-enseignet*.

7. Hは文字ではなくて気音の記である。例えば次の語における如く: *heitez, haiez, huis, hors, hounte, honye, hopeland, herd, harde, aherder* これらでは h は常に発音されていた。

しかし次の語では h を発音してはならない。 *huit, huie, hier, heyer, heur, hostiller, he, helas, honour* そして同様の言葉においても同じである。

* 大陸フランス語ではゲルマン語起源の語においても13世紀には気音の h は発音されなくなっていた。AN にあっては英語の音体系の影響がみられたと思える。

8. I とその他の母音は語中, 二つの子音間にはさまれるか, 母音と子音の間にはさまれるか, あるいは語の最後におかれた時, 両方の音を持つようになる。

biens, riens, ciens, liens, meins, eins, ioie, voie, arraier など, このような場合である。

* 上述の記述は i が二重母音の一つの要素となることを言うのであろう。i が半子音（半母音）となる場合では *biens, riens, ciens, liens* におけるように *ien* は半子音 [jen] となり、半母音となる場合では *meins, eins* におけるように [ejn] となる。*ioie, voie* では [oj], *arraier* では [aj] となるということらしい。

9. l は語中において母音が直ちに続くとき、個有の音を保持する。例えば *ouelement, parlant* における場合である。しかし子音が次に続くと l は u の音を持つ：*loialment, principalment* のようにである。ここでただ *ils* という語だけは例外とする、この語では l は u 音をほとんど持たない。

ils vount enscamble. (彼等是一緒に行く)

ils ount fait. (彼等は成した)

l がまた語末におかれ、そして次にくる語が子音で始めると、l は個有の音を失い、u の音を保つ。

l'amirall d'engliter (英国の将)

chiualt sorelt (栗毛の馬)

fel de makerell mauvez est. (鮪のはらわたは悪い)

beal fitz (美しい子息)

しかしまことに次にくる語が母音で始めると l は個有の音を保つ。

mult aultre (多くの他のもの)

mult amy (多くの友人)

loial hom (忠実な者)

tiel usage (そのような用法) などがある。

またしかし、l が単音節の語末に置かれ、そのあとに子音がすぐ続くと u 音を持たない。

il s'en est alé (彼は行った)

ie le voilt ben (私はそれをとても望む)

これは同様の言葉においても同じ。

* 子音の前で l が u の音を表わしていたために、フランス大陸では l の代りに u と書くようになった。上述の例文にあっては子音の前の l の発音の混乱を示している。例えば *bel* の綴りにも幾通りかがみられる。*beal, beau, beaul, beu, beel, biau* などである。語末の l は子音が続くと u の音になると例題は示しているが、AN においては語末の l が多くの場合個有の音を持っていた可能性は強い。しかし、例文 *ie le voilt ben* における *voilt* では l がどのような音価を示し

ていたのか不明である。

10. Nは1人称複数における任意の動詞ではmの場所に書かれ、そしてmの音を持つ。例えば：aymons, enseignons, lisons などの場合である。同様に子音の前でもまたmと発音されるべきである。

ensi, penser, sentiere, envoiere, entiere, coumaunder, vendersdy の如くである。

* 1人称複数動詞の活用語尾は *-ons* であって *-oms* ではない。例題の綴りは正しいが *-oms* の m の場所に n が書かれて m の音を持つという記述は極めて興味深い指摘である。AN の特徴である語尾 *-oms* を使用していたであろうという事実がうかがわれる。Pope : [74.1.] また、s, f/v, t/d, という子音の前で n を m と発音するという現象も AN の特徴であろう。

11. Pは単音節の語で二子音間にあるときは音を持たない：temps, corps などである。そしてこれらの語および他の類似の語においてはPを省略して次のように書いても間違いではない。

tens, cors, semagn など、そして同様の語も同じ。

12. Qはフランス語の綴りによると、ある語においては二つの母音が直後に続くのでなければ書いてはならない。即ち qui, que, quar などであるが、同様に q の代りに k を書いてもよい。また、quar という語については k, q, c を区別なく、書く人の思いのままに書いてもよいのである。

* AN では q に代る k の使用が往々にして見られる。desque の代りに dekes, jesque の云りに jekes, kes (que+les) などもある。Pope : [cf. 46.]

13. Rは時に語末で r 音を保持し、時には z という音を持つ。

vuilez vous aler (貴方は行きたいのですか) 又は
voilez vous alez である。同様の言葉においても同じ。

* [r] は母音間で [z] となる現象がある。上記の記述はこの現象の影響とも考えられ興味のある言及ではあるが、語末で母音に先行しないとき、aler が alez となる音変化はないと考えられる。

14. 単独の S は直後に子音が続く場合、語の中間においては発音してはならない：

tres redoubte, tres noble, sisme, disme などのように。[アンダーライン筆者]

この規則から次の語が除外される：

prosperite, chastelt, chestaine, substance, meschaunt, obstant, augustus, instance, register, sustenance, espirer, sustener, substituer, escharn, transgliter, enspirer, descharger, estauncher, estendre, espaundre, peschere, constrayner, despenser, escuter,
この種の全ての名詞と、どの様な方法にせよそれから派生した副詞、動詞それらにおいては子音がすぐ直後に続いても s は常に発音しなければならない。

* 記述は不明確である。s を発音する語として掲げられている上記の語を現代発音規則に照合すると、語中の s を発音する場合と、発音しない場合に分かれる。

母音が直後に続くときは、s は固有の音を完全に保持する：

tres excellent (まことに卓越した), *tres hautisme* (いと高さ)

tres honoure (畏敬すべき), *tres humble* (いとつつましき)

などのように。

* 固有の音 *sonum proprium* というのは無声子音の [s] であるのか有聲子音 [z] であるのか、不明である。

複合字 *ss* は語中におかれる場合常に発音しなければならない：

poissoun, puissaunt などのように。

* 無声子音の [s] としてであろう。

もし単独の s が語末に置かれると、それらの語がたとえ代名詞、動詞、接続詞又は前置詞であろうと、次に子音で始まる語が続く時には自己の音を最少限に保つ：

dieu vous save et garde (神が貴方を救い護られんことを)

vous sentez vous sainz en coer (ご気分はよろしいのですね)

voillez vous manger (召し上りますか)

vuillez vous juer (競技をなさいますか)

などのように。

* 自己の音とは無声か有聲かは不明であるし、最少限に *minime* という表現も暖

味である。綴りには s と z との混同が見られる。

しかし、もし次の語が母音で始まると、その時 s は発音しなければならない。このように：

avez vouz fait (できましたか)

vouz em pri (どうぞ) [アンダーライン筆者]

seiez vouz (お坐り下さい)

ia estez vouz un de eaux (貴方は既に彼等の一人です)

そして同様のものもまた同じ。

* 上記の説明に対し *avez vouz fait* と *seiez vouz* の二例は適当ではない。

しかし分詞、形容詞、名詞そして感投詞においては、単独の語末の s はもし子音が直後にくると自己の音を保持せねばならない。このように：

vouz avez assez de viand (貴方には肉が十分あります) [アンダーライン筆者]

jeo sui assez ben amez de mez servauntz (私は使用人たちから大変慕われている)

loiez soit dieux (神はあがめられるべし)

そして同様のものもまた同じ。

* 綴りには再び s と z の混同が見られる。assez の綴りには asses もあった。

assez の z を s 音として発音させるという記述も興味深い。mez servauntz の mez の z も、loiez soit dieux の loiez の z も無声 [s] 又は有声 [z] で最少限に発音することとなるのか。

15. T が語末に置かれ、次の語が子音で始まる時は、自己の音を完全に消さなければならない：

qu'est ceo qu'il dist (彼は何と言ったのか) [アンダーライン筆者]

il est prest (用意ができた)

il ne poet chaloyre (必要ではあり得ない)

il fuist tout esbaye (彼はすっかり驚いて逃げた)

il fist que sage (彼は賢明に振舞った)

il n'ia que vanite en cest mound (この世には虚栄しかない)

また同様の場合も同じである。

しかし t は時にはこの規則に反することなく自己の音を語末において持つ：

as tu fait prest nostre sopere (我々の夕食の準備はすっかりできましたか)

il prent deux marcz par an (彼は毎年2マルクを得る)

nos vesins nous ayment ben (我々の隣人は我々を非常に愛する)

il boit trope hault (彼は大酒飲みだ)

il puit malement (彼は悪臭を放つ)

これらおよび同様のものにあつては、次の語において子音が直ちに続こうとも t は個有の音を保つ。

* t が時には語末で自己の音 *sonum suum* を保つという現象は中期フランス語の時期まで見られるのであろうが、上記の記述はちょうど語尾の子音が発音されなくなってゆく過渡期の現象を示しているようである。

(a) 名詞と現在分詞の単数において t で終るすべては複数において t を失い、s または z をもって書かれ、発音される：

単数における *saint*, *faisaunt*, *alant* は複数では *sains*, *faisauns*, *alans* となり、また同様の語も同じである。

* 語末の t に複数を表示する s を付す場合、ts は z と表記されるのが、古フランス語の規則であった。故に s を書くことは正しくない。すなわち *sains* は *sainz* と書くのが正しいのだが、ts は s に移行したので AN 第2期においては z, s が相互に交換されるようになった。Pope : [50.]

語中の T は常に完全な音を持ち、女性の語が直後に続くときは次の如くなる：

lez saintez virges du ciel (天上の聖女たち)

ad toutz et quauntez foitz vouz plerra venir, vous serrez bien venuy

(お越しになりたい時はいつでも貴方を歓迎しましょう)

beaucop dez femmez en Loundrez sount merchauntz

(ロンドンの多くの婦人は商人です)

また、同様の語も同じである。

* この時代では *toutz*, *merchauntz* は *toutez* (*toutes*), *merchauntes* と綴るべきであろう。

(b) ガリア語によると次の語で t は省略される：*liz*, *pounz*, *porpoinz*, そしてまた、z または s を伴ったいくつかの語にあつても同様。

- * この場合 **ts** は **z** と表記すると書かなければならないだろう。本来の語尾 **t** に **c. s** の格語尾 **s** が加わってできた **z** と複数の場合とがある。

しかし、ガスコニア人 (*Vasconici*) とアングリア人 (*Anglici*) は **t** をもって書く、このように：

a my sount noz litz faitz [アンダーライン筆者]

(私のために我々の寝台は準備されている)

sount noz porpointz prestez (我々の胴衣は用意されている)

なぜならばガスコニア人は決してガリア人ではないからだ。

- * 作者にとっても、また当時の人々にとっても **ts** を **z** であらわすということが十分に理解されていなかったようである。

(c) ガリア語で用いられている接続詞 **et** における **t** は書かれてあっても発音されない。

16. **L**については、**doulz**, **ceulz**, **meulz**, **peulz** のような語においては **l** をもって書いてもよいし **l** なしに書いてもよい。

- * 古フランス語によると **z** は **ls** である。**dolce** は **l** なしに **doz** と書きうる。
l + 子音の母音化は AN にあっては徐々に進んだ。Pope : [38.1.3.0.] (18.を参照)

そして **l** が語末に置かれ、子音に先立つとき、**l** は **u** の音を持つ、例えば **veaul** のように。しかし **gentil de corps** や同様の場合もある。

- * 例題 **gentil** の **l** がどのような音を保持していたかは定かでないが、音は一定しなかったらしい。

OED が初例としてあげる **gentil** は1225年に借用されている。

Gentle (aj.) 1225 *Ancr. R.* 166 Noble men and gentile ne bereð nout packes (well-born)

1330 R. Brunne *Chron.* 188 Gentille of norture, and noble of lynage (courteous)

17. **U**は語中に置かれた場合、個有の音を失う、例えば：**que**, **qui**, **quar**, **guerri**, **langue**

quel, quatre, guere などのこのような場合である。

18. Xは語末に置かれると s のように発音してもよく、また z のように発音してもよい：
no chivalx (我々の馬), chivelx, huiselx, ceulx, telx, doulx, meulx, これらのよう
な語は x, s または z のいずれかをもって書いてよい。そして同様のものもまた同じ。

* 上記の例では s を x と考えている。x は us である。cf. F. Brunot: *Histoire de la langue française*, t. I, *De l'époque latine à la Renaissance*, Paris, 1966, p. 523 を参照。

(a) この dieux という字は、時には x をもって書かれ、時には x なしに書かれるが、たとえ書かれても発音しない：

dieux vouz save (神が貴方を救い拾わんことを)

dieux soit garde de vouz (神が貴方をお守り下さるように)

* us に当る x を、この時代には s と混同しているようである。

しかし呼格に置かれる時、x は音を保持する、このように：

dieux, eiez pite de moy (主よ、私を憐れみ給え)

* 男性単数主格語尾には s が付されていたので、上記の例文によると x を s と理解していたことが分かるであろう。

そしてもし子音が続くときは、このように発音しない：

dieux mercye (神のお加護)

同様のものもまた同じ。

* この場合 dieux は斜格と考えられるから x は不要である。

(b) この doulz という語は男性および中性においては語末に x をもって書かれ、女性においては c をもって書かねばならない。

* l は u になっていたから dulcis は dous となる。doulz における l は hyper-correction の結果であり、z は s に対応する。また、x は us であるから dulcis は

dox ともなるだろう。しかし12世紀ごろにxはsとみなされたらしい。従って男性形は doux となる。女性は doce ないし douce であったことを示している。dolz に対して doz もある (16. を参照)

19. ouec という語は語中に s なしにいろいろと次の様書き得る：ouequ, oueques と。
- (a) この solonque という語は n に終わってもよく、また c に終わってもよい。solon または soloncque のように c を以て。但し c は発音してはならない。
- (b) escue, esau(?), escuiele, cuiler という語とまた同様のものは c をもって書き, q をもって書いてはいけない。

* 当時における q と c の慣習的用法を論じている。

20. Y はまことにどのような場合でも i という音を持ち、多くの場合 i の代りに書かれる。それは飾り文字のためである。特に個々の都市や村の名前、男性または女性の名前、官職位階の名称においてそうである。

* Y についての当時の注目すべき見解である。この使い方は AN 独特のものであろう。

21. Z は実際語末にあっては s のように発音されるべきである、例えば：querez, serchez aimez などのように。

22. 先に部分的に母音のところでは叙述したように次のことを知らねばならない。ある単音節の語が母音で終り、次の語が母音で始まるその時はいつも、その二つの語は発音では結び合わされねばならない。最初の母音は書いても発音してもいけない、このように：

la abbe ないし l'abbe (修道院長)

l'on (人) ないし la on

masdre d'argent (銀の盃)

j'aime (私は愛する)

また同様の語においても同じ。

* abbe は abbé か abbaie かが不明瞭であるが la と le の混同は考えられる。la on の la は on が代名詞とすれば誤りである。le と la の混同は屢々 AN に見られる特徴であった。

上記の説明は a と e の母音省略を la, de, je について論じている。

23. すべての動詞においてその各々の活用語尾が s に終る場合は書き手の自由にまかせて s と書いてもよいし z と書いてもよい, 例えば:

amez, veniez, ditez, lisez, pensez などである。

* s と z の使用が現在と異なることは屢々指摘してきた。一般に動詞の活用語尾が s に終るのは 2 人称単数の場合であるし, z に終るのは 2 人称複数である。作者はこの差異をどのように認識していたのだろうか, 明らかではない。

またその性がどのようであれ, e に終るすべての分詞はその分詞を派生させるもとの動詞と異なって語末に二重の ee を書かねばならない。

* 過去分詞について説明しようとしているのであるが叙述は不十分である。二重の ee を書くのは女性単数語尾に限られる。

このように過去分詞 amee は動詞 ame と異なるのであり, enseignee は動詞 enseigne と区別するために書く。また同様の語も同じである。

* ame および enseigne は 1 人称, 3 人称単数現在形であるのか, 英語の不定法の形の類推から, 不定法と混同されているのか, 不正確な記述とみなされる。

24. c, ff または g で終る名詞は単数においては blanc, viff, long のように, 複数においては, ガリア語に従えば語末に s を付して書かねばならない。そして完全に c, ff, g などを除去して blans, vis, lons のように書かなければならない。

* 当時の習慣をあらわす。しかし 12 世紀中葉あるいはもっと早くから, 屈折の s の前に 語幹末子音を導入する 傾向があり, 例えば vifs hommes (発音は vys hommes) のように書いた。Pope: [57.1.2.]

25. si と se は区別する。すなわちガリア語の si はラテン語の sic であり, ガリア語における se はラテン語の si である。

26. ラテン語に対応するすべてのガリア語の単語はできる限りラテン語の書法に従うべき

である。Pope : [44.1.]

* *Orthographia Gallica* も次のように言う : 「たいていの場合, ラテン語で書いてあるように, フランス語でも書けばよい。例えば, *computum* は *compte*, *septem* は *sept*, *prebenda* は *prebendre*, *opus* は *oepe* の如く^⑧。」この時期にしては注目すべき記述である。一般に大陸フランスにあっては16世紀に *Hypercorrection* の傾向が顕著になるからである。AN の一特徴 *précocité* に言及していると言えるであろう。

27. どのような性であれ語末に *ee* という二重音を持つとなるすべての名詞は二つの *ee* をもって書かねばならない。例えば *pensee*, *privee*, *finee*, *rousee*, *vinee* など。ちょうど上述の過去分詞のように終り, そのように発音する語についても同様である。

注

1. Owen, Annie ed., *Le Traité de Walter de Bibbesworth sur la langue française*, Paris, 1929. Slatkine Reprints, Geneva, 1977.
2. Stürzinger, J. ed., *Orthographia Gallica : Ältester Traktat über Französische Aussprache und Orthographie*, Altfranzösische Bibliothek 1884, VIII. reprinted, Wiesbaden, 1968.
3. Stengel, E. ed., 'Tractatus Orthographie Gallicane per M. T. Coysurelly,' *Zeitschrift für neufranzösische Sprache und Literatur*, 1879, 1, pp. 16-24.
4. Pope, M. K. ed., 'The *Tractatus Orthographiae* of T. H., Parisii Studentis,' *Modern Language Review*, vol. 5, 1910, pp. 185-193.
5. see : Introduction by M. K. Pope in The *Tractatus Orthographiae* of T. H., Parisii Studentis pp. 185-189.
6. M. K. Pope 「アングロノルマン語」英語学ライブラリー(67) 大高順雄・福井秀加 訳述, 研究社, 1984, 第3版。
7. Short, Ian and Merrilees, Brian eds., *Benedeit : The Anglo-Norman voyage of St Brendan*, Manchester University Press, 1979.
8. *Orthographia Gallica* op. cit. (CO 85), p. 16.